多言語対応・ICT化推進フォーラム
～基調講演「オモテナシからオトモダチへ」～

講師：モーリー・ロバートソン氏　タレント・ミュージシャン・国際ジャーナリスト

2019年12月24日、「2020年オリンピック・パラリンピック大会に向けた多言語対応協議会」は、多言語対応の先進的な取組やICTの情報を広く共有・発信するため、「多言語対応・ICT化推進フォーラム」を開催しました。

基調講演では、タレント、ミュージシャン、国際ジャーナリストなど幅広い分野で活動するモーリー・ロバートソン氏が登壇しました。日米双方の国で教育を受けた後、東京大学とハーバード大学に現役合格し、日本の古典文学にも通じるモーリー氏は、日本を訪れる外国人が日本文化の影響を受けて自国で拡散させる様子や、反対に外国人が日本や日本語に与える影響など、相互の文化交流についてユーモアを交えながら話し、会場を沸かせました。

モーリー氏は急速に増加する現在のインバンド状況は今後も続き、その流れを止めることはできないだろうと話します。出入国管理法の改正により定住外国人の増加も予想されます。インバウンドと定住外国人という2つの要因により、日本が世界に、新たな刺激を生み出す元となっています。例えば、かつての外国人は海苔を食べず、寿司から海苔を剥がして食べる人さえいました。それが今では東ヨーロッパの国々に海苔やヒジキが定着しています。また、日本のカニカマがフランスでブームになり、欧州最大のカニカマ工場が東ヨーロッパのリトアニアに建設されました。このように日本は、自分たちでは気が付かないうちに外国に影響を与えています。

外国人が日本を訪れ、色々なものが日本に入ってくる一方で、日本で得た感動や体験を彼らが持って帰ることで、いつの間にか日本の文化が拡散し、日本の様々な文化や味覚、感受性が世界中に広がっています。カニカマのように日本人が当たり前だと思っているものが、海外では新しい価値を生み出していると、モーリー氏は会場を盛り上げます。国内に目を向けると少子高齢化で元気のない日本に見えるかもしれませんが、日本は海外に対して影響力を持ち、新たな時代の希望「A New Beginning」に溢れていると話します。

モーリー氏は、日本語と外国語の言語の混じり合いにも注目します。そしてこれから増加するであろうベトナムやタイなど東南アジア諸国の外国人にも分かりやすい「やさしい日本語」という考え方に着目しています

すでに高知新聞社ではやさしい日本語バージョン新聞が発行されています。そこではすべての漢字にひらがなのルビがふられ、ニョクマム（nước mắm）※1、バインミー（Bánh mì）※2のようなベトナム語はカタカナ表記で日本語のように掲載されています。こうした言語の混じり合いによって、100年後には新しい日本語が生まれているかもしれないと話します。言語の混じり合いによって文化の衝突が起きるかもしれませんが、新たな価値も生まれビジネスチャンスになる可能性もあります。人気漫画の作者が、新作マンガを日中韓の電子媒体で同時配信を始めた事例では、セリフは翻訳されていても、背景の効果音や擬音は日本語のままで描かれます。このように日本のマンガの独自性や文化を表現した作品が、日本の何倍もの市場を持つ中国など、外国へと広がっています。

モーリー氏は、今後、日本に定住する外国人が増えていくことで、日本式の表現や体験の中にあるものを外国人も感じるようになると期待しています。そして自分の母国へと持ち帰っていただくことで、日本のソフトパワーが世界中に広がります。モーリー氏は、こうした新しい時代の訪れによる、日本の活性化に期待を寄せています。

※1 ニョクマム：ベトナム料理の調味料。魚と塩で作る魚醤
※2 バインミー：ベトナムのサンドウィッチ

参考（高知新聞：やさしい日本語バージョン）→https://www.kochinews.co.jp/article/333961/

(令和2年2月作成)